

受難節第2主日礼拝説教「**霊を見分ける**」

日本基督教団石神井教会 2019年3月17日

【旧約聖書日課】創世記 6章11～22節

¹¹この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。¹²神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を行っていた。¹³神はノアに言われた。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。¹⁴あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。¹⁵次のようにしてそれを造りなさい。箱舟の長さを三百アンマ、幅を五十アンマ、高さを三十アンマにし、¹⁶箱舟に明かり取りを造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の側面には戸口を造りなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。¹⁷見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。¹⁸わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。¹⁹また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならぬ。²⁰それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。²¹更に、食べられる物はすべてあなたのところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。」

²²ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 4章1～6節

¹愛する者たち、どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい。偽預言者が大勢世に出て来ているからです。²イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。このことによって、あなたがたは神の霊が分かります。³イエスのことを公に言い表さない霊はすべて、神から出ていません。これは、反キリストの霊です。かねてあなたがたは、その霊がやって来ると聞いていましたが、今や既に世に来ています。⁴子たちよ、あなたがたは神に属しており、偽預言者たちに打ち勝ちました。なぜなら、あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです。⁵偽預言者たちは世に属しており、そのため、世のことを話し、世は彼らに耳を傾けます。⁶わたしたちは神に属する者です。神を知る人は、わたしたちに耳を傾けますが、神に属していない者は、わたしたちに耳を傾けません。これによって、真理の霊と人を惑わす霊とを見分けることができます。

【福音書日課】ルカによる福音書 11章14～26節

¹⁴イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。¹⁵しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、¹⁶イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。¹⁷しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。¹⁸あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。¹⁹わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。²⁰しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。²¹強い人が武装して自分の

屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。²²しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。²³わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」

²⁴「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出て来たわが家に戻ろう』と言う。²⁵そして、戻ってみると、家は掃除をして、整えられていた。²⁶そこで、出かけて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊を連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうになると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」

どの霊も信じるのではなく…

教会史の早い時期に教会の営みの習慣として整えられた受難節（レント）の四十日の歩みは、主イエスが十字架へと向かわれた道を辿り、従って行く歩みとして整えられてきました。それは、まず何よりも、主イエスが弟子たちのためにしてくださったことを、わたしたちのためにもしてくださったこととして受けとめることから始まる歩みだと言うことができるでしょう。

主イエスは、神の国の福音を宣べ伝えられる旅を重ねられる中で、しばしば、人に取りついた悪霊を追い出されてきました。今日の福音書日課（ルカ 11 章）も、そのことを伝えることから語り始めています。

この場面に限らず、主イエスが悪霊を追い出してくださった出来事を、わたしたちはいくつも思い出すことができます。有名なところでは、主イエスがガリラヤ湖の向こう岸に舟で渡って行かれたときに、悪霊に取りつかれて墓場を住まいとしていたゲラサ人の男から悪霊を追い出してやって、その追い出された悪霊が豚の群れの中に移された挙句の果て湖になだれ込んでしまったという出来事があります（ルカ 8:26 以下）。あるいは、悪霊に取りつかれて、突然叫び出したり、けいれんを起こしたりする子どもから悪霊を追い出されたという出来事もありました（ルカ 9:37 以下）。そのような悪霊追放の様子に比べると、今日の福音書で伝えられている悪霊追放は、あまり深刻そうには描かれていません。「それは口を利けなくする悪霊」にすぎなかった、というのです。多弁すぎるよりは、無口なほうがよい、ということだっただけであるでしょう。口を利けなくする悪霊が取りついた人にどのような生活上の実害を与えていたのか、疑問にも思えます。むしろ、今日の福音書日課の後半で主イエスが汚れた霊のたとえで語られた、もっと悪いほかの七つの霊というのがどんなものなのか、ということのほうが気になるくらいです。

初代教会の弟子たちは、霊の善し悪しを判断し見極めることに、大きな関心を持ち、教えています。使徒書日課（Iヨハネ 4 章）は、「どの霊も信じるのではなく、神から出た霊かどうかを確かめなさい」と勧めていました。人の精神を左右するものとして、「霊」的な働きをするものがさまざまにある、というのです。しかし、「霊」的なものを何でもありがたがって歓迎してよいかというと、そうではない、というのです。それは、神から出た霊かどうか、イエスのことを公に言い表す霊かどうか、真理の霊か人を惑わす霊か。それを確かめ、見分けなければいけない、というのです。そのように勧めるのは、実際、初代教会の中に「霊」的なことの受けとめに混乱があったからではないでしょうか。「霊」的な働きを曖昧にすることによって、教会に混乱が生じていたのではないのでしょうか。

《神の指》で悪霊を追い出す

「霊」の話になると拒否反応を示す方もあるかもしれません。神秘思想やオカルトの世界で語られる「霊」の描かれ方を思い起こせば、当然かもしれません。聖書の中に描かれる「霊」的な話でも、特に「悪霊に取りつかれた人」の描写には、理解不能な現象として語られる場合が確かにあります。聖書の中に描かれる人々が、そのような超常現象的な「霊」の世界を信じていた、ということもあったかもしれません。けれども、そうだとすると、主イエスが「霊」の働きについてそのように理解していたということにはならないでしょう。

福音書日課の前半は、「ベルゼブル論争」と呼ばれる場面です。主イエスは悪霊を追い出すという活動をなさっていました。その働きを見て、批判して言う者たちがいたのです、「**あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している**」と。あるいは、主イエスの神秘的な力を確かめようと**天からのしるしを求める者**もいた、というのです。ところが、主イエスは、そのような批判や要求に対して、神の力を見せつけることで応じる、ということにはなさいませんでした。ただ、こう言われたのです。「**わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ**」。

これが、口を利けなくする悪霊を追い出して語り始めさせるということをやさうしていらした主イエスの、なされていたことについての説明なのです。

「**神の指で悪霊を追い出している**」と、主イエスは言われます。マタイ福音書では、同じ場面を「**神の霊で悪霊を追い出している**」と主イエスが言われたと伝えています。「神の指」にしても、「神の霊」にしても、どちらにしろ「神の力」を意味している言葉でしょう。ただ、「神の指」という言葉は、「神の霊」に比べると、聖書の中で用いられることが少ない用語です。とは言え、「神の指」という言葉には、旧約聖書を知っている人には特別な響きがあったはずで、それは、モーセ物語の中で、十戒の成り立ちについて用いられる言葉だったからです。モーセがシナイ山に登って神から授けていただいた十の戒めの記された石の板は、「**神の指で記された石の板**」（出 31:18⇨申 9:10）と説明されているのです。旧約聖書を知っている人にとっては、「神の指」は、人に「神の言葉」が与えられることを思い起こさせる言葉なのです。

主イエスは、「**神の指で悪霊を追い出している**」とおっしゃられました。「口を利けなくする悪霊」を、「神の言葉」を与える「神の指」で追い出しているとおっしゃられていた、ということです。神の指で悪霊を追い出してくださった主イエスは、その人に神の言葉を授けてくださった、のです。その人がものを言い始めたというのも、神の言葉を語り出した、ということなのではないでしょうか。

ルカ福音書は、「霊」の働きを、そのように理解して描いているはずで、ルカ福音書の続巻・使徒言行録 2 章の聖霊降臨の出来事は、弟子たちに聖霊が降ることによって、彼らが神の御業を語り出した、という出来事でした。そのことの伏線のように、今日の福音書日課の直前には、主イエスが弟子たちに「**天の父は求める者に聖霊を与えてくださる**」（11:13）とお約束くださっていました。聖霊は、語る言葉を持たなかった者に、言葉を与え、語り始めさせるのです。

あなたと共に生き延びるように！

わたしたちの精神は、心のあり様にしろ、ものの考え方にしろ、価値観にしろ、言葉と結びついたものです。もちろん、自分の心の状態を言葉にできないこともあるでしょう。自分の考えを言い表す言葉が見つからないこともあります。あなたの価値観を言葉で説明せよと言われたら、困ることもあるでしょう。それでも、わたしたちの心や考え方や価値観は、言葉に結びついて明確にされ、それが自分自身のものであると自覚されるようになっていくということは、確かでしょう。逆に言えば、わたしたちの精神は、言葉に支配されているのです。曖昧な心の状態を説明する言葉が与えられて、わたしたちは、自分の心がどのような状態なのかを分かったつもりになります。理路整然とした考え方を説く言葉を聞いて、その考え方を自分のものにします。共感できる言葉で価値観を示されて、その価値観を共有し語るようになります。

そうであれば、わたしたちは、どのような言葉を聞くかということに注意すべきでしょう。わたしたちは、耳障りのよい言葉、自分好みの言葉、自分を正当化してくれる言葉を、いつも探し求めています。自分の今を認めてほしいと、いつも求めているところがあります。しかし、それは、本当にわたしたちを助ける言葉なののでしょうか。わたしたちに命をもたらす言葉なののでしょうか。わたしたちをこの世界で共に生きていくことができるようにする真実の言葉なののでしょうか。そうとは限らない。多くの場合に、それは間違っている。それは、人を惑わすばかりのものだ。使徒書日課のヨハネであれば、そう言うのではないのでしょうか。主イエスであれば、それは、悪霊の言葉だ、否、真実の言葉を語らせなくする汚れた霊だ、とおっしゃるのではないのでしょうか。

牧師のわたしは、皆さんの前で話す機会の多い者として、怖れを覚えることがあります。自分が口にしていく言葉は、悪霊の言葉なのではないか、と。そうであればこそ、わたしは、主イエスの前に進み出て、悪霊を追い出していただくことを願うのです。「主イエスよ、神の指で悪霊を追い出してください」と。

それは、しかし、わたしたちの中に言葉が無くなることではありません。神の言葉が与えられることです。神が、その指をもって、石の板ではなく、わたしたちの内に、御言葉を記してくださるのです。もちろん、それは、神秘的なことではありません。あの石の板に刻まれた神の言葉と同じもの、「聖書」が、わたしたちには与えられている。この「聖書」の言葉に聞くときにこそ、わたしたちは、神の指がわたしたちの内に御言葉を記してくださる経験をするのです。わたしたちの言葉が、神の御言葉によって書き換えられていく経験をするのです。そして、すべての言葉が神の御言葉に書き換えられたときには、主イエスのようになるのでしょうか。それは、はるか先の希望です。しかし、主イエスはすでに、神の指のお働きくださる術を、先だってお示し下さっているのです。

皆さんの心に刻まれるべきは、神の指で記される御言葉です。他のどんな言葉でもありません。一人の神の御言葉が、皆の心に刻まれ、生きて語り始めるのです。「共に生き延びよ」とノアに語られた神が、命の御言葉によって言葉を書き換えられた一人ひとりに命を与え、共に生かして下さるのです。